

K450.2

1a

暫 定  
師 範 地 理

本 科 用

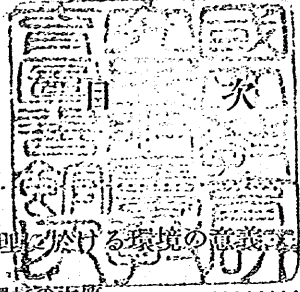
卷 一

(第 一 級)

文 部 省

文部省圖書局刊行部贈

K450.2  
1a



序 説	1
第一章 地理に於ける環境の意義	9
第一節 環境の本質	9
第二節 自然環境の構成	10
第二章 生活圏としての主要自然地域	15
第一節 主要自然地域	15
第二節 温 圏	24
第三節 冷 圏	62
第四節 熱 圏	92
第五節 乾燥圏	121
第六節 寒 圏	144

## 序 説

**地理學習の意義** 地表は人間の居住する場所であり、人間活動の営まれる舞臺である。従つて人間活動は地表の持つ特性、即ち位置・地勢・氣候・土壤・植生等の自然條件と密接な關係を保ちながら展開する。それと共に、人間活動の様式は歴史的背景・民族性等の文化條件によつても左右される。

また人間活動は決して居住地域を中心とする狭い地域内に於て孤立して行はれるものではなく、必ず他の地域との依存關係を保ちながら営まれてゐる。このことは如何なる原始民族にも當嵌するが、特に文化の進んだ民族にあつては、その關係する範圍も廣く、今日に於ては程度の差こそあれ、世界何れの地域の住民も何等かの關係によつて繋がれてゐるといつても過言でない。

以上述べたやうな人間活動の性格はここに改めて事例を擧げるまでもなく、今日まで學習した諸學科を纏つて顧みることによつて充分に了解することができよう。

かくして人間が生活を営む上には、必ず自己の居住し、活動する地域に就て透徹した認識を持つことが必要であると共に、自己の生活と關聯を持つ他の地域に就ても深い關心を以てその實相を究めることが要請される。即ち己を知り他を知ることは個人の間の關係に必要なばかりでなく、人間活動の舞臺としての地域の間にも重要なことであつて、ここに地域の持つ性格をときあかす學としての“地理”に對する要望が生れる所以がある。

これを要するに、地理は地域の實情を自然條件・文化條件及びそれらの相互關係に於て考察し、他の地域との關聯及び比較に於て究明する使命を帯びた學問である。従つてこの學習は單に健全な地域的知識の習得に資することに留まるものではなく、事象を正確に觀察し、對象を論理的に考察する識能を向上せしめ、併せて郷土愛・國土愛より國際親善にまで發展すべき精神の涵養に資する點にその眞意義を見出すのである。

文化の發展と地理 以上述べたやうに、人間活動が営まれる上には必ずその直接・間接に關係する地域に對する究明が要請されるのであるから、人間活動の特に活潑な時期、即ち文化の興隆期は當然地理に對する要望が特に熾烈な時代である。

我が國に於ける地理の發達 いま我が國地理學發達の上にこれを顧みると、我が最古の地理書と目される風土記(和銅風土記)の勅撰も、單に全國の郷名・物産名の目録の記録に能事足れりとしたものではなく、その根本の意識に於ては、古事記・日本書紀の編纂と同じく、我が國の統一國家としての完成と國民意識の昂揚とに資せんとするものであつた。また江戸時代初期までの長い間、日本全國の基本圖となつた所謂行基圖も、奈良時代の末期に現れた僧行基の作といはれ、かかる意圖が多分に含まれてゐたものである。

平安時代にも延喜式・和名類聚鈔等と共に風土記(延長風土記)の撰進があり、これまたその盛時の一指標と見做し得るものである。それ以後江戸時代初期に至るまでは、地理書と名づくべきものは現れなかつたが、社會の進展と共に國民の間に國土の實情に對する關心が深められ、個人の見聞を蒐集せる隨筆・旅行記等の類が數多く著作された。平安時代の土佐日記(紀貫之)・更級日記(菅原孝鏡女)・伊

勢物語、鎌倉時代の十六夜日記(阿佛尼)・海道記(源光行)・東關紀行(源親行)、室町時代の拾芥抄(東山左大臣實熙)・節川集等はその好例である。

更に降つて我が國近代封建制度の完成期ともいふべき江戸時代になると、諸侯の多くが彼等の封土に就ての藩撰地誌を編纂し、これによつた私撰地誌も數多く刊行され、寶曆・寛政の頃になると、藩撰または私撰の地誌は普く全國に行き互つた。このことは藩といふ一種の封土意識が然らしめたものであつた。即ち當時の藩は恰も今日の國家の如く、行政・經濟につき個々獨立的の要素が多かつたために、奈良時代に於て風土記が必要であつたと同様の意味で、各藩に自己の地理書を持つ必要があつたのである。またその後期には、幕府にあつても地誌編修局を設け、府内・武藏・相模の地誌が編纂され、諸國の分もこれに續いて行はれた。その他民間の名所本・道中記等は枚舉に遑ないほど現れたが、このことは國民生活が既に全國的の規模に營まれ、國民の關心が全國に及んだことの反映と見ることができる。しかしこの時代の地理書はその考察の態度、記述の方法等、内容的の方面では奈良・平安時代のものに比してさしたる進歩の跡なく、記載的の記述に終始してゐた。

しかしながら、この時代には前時代までには見られなかつた二三の顯著な地理上の業績が現れた。即ち、その一つは外國地誌の著作が見られたことであつて、華夷通商考(西川如見)・采覽異言(新井白石)等はその代表的のものであるが、このことは當時の外國に對する關心を反映したものである。また我が國で始めて科學的方法に基づく實測圖が作成されたのもこの時代であつて、全國的には伊能忠敬の精密な各種地圖が完成し、地方的の大梯尺の地圖も全國に互つて作

4  
られた。またその後期には北邊邊疆地方の探検が屢次に互つて遂行されたことも特記すべきで、當時の緊迫した對外事情を反映せるものである。最上徳内・近藤重藏・間宮林藏等の北邊調査並びに探検はその主なるものであつて、間宮林藏の間宮海峡発見の如きは當時世界の疑問であつた樺太の島嶼性を確認せるものとして、世界地理學界に與へた貢獻は頗る大といふべきである。

明治維新以來、泰西の文物が輸入され、國運並びに文化の興隆期に入ると、内外の地理に関する書籍の刊行も増加すると共に、その考察方法も漸次科學性を取入れて進歩して行つた。まづ從來の各藩分立の状態が打破され、新政が著々とその緒についた明治の初期には、新政府の内にあつても修史の業と同時に地理書編纂の計畫が樹立された。その第一歩として明治5年正院に地誌課が置かれて日本地誌提要が刊行され、ついで皇國地誌編纂の大計畫があつた。これは安房誌を刊行したのみで惜しくも完成を見ずして中止されたが、文化興隆の機運が地理に對する要望と極めて密接な關係を持つてゐることを明示するものである。また海外知識に對する要望の現れとしては、世界國盡(福澤諭吉)・輿地誌略(内田正雄)等が刊行されてゐる。更に明治も後半期に入ると、日本地理資料(村岡龍興)・大日本地名辭書(吉田東伍)・大日本地誌(山崎直方・佐藤傳藏)等が現れてゐる。

大正末期には郡制廢止前後に各郡で郡誌の編纂が行はれ、昭和以後には地理に関する刊行物は躍進的に増加した。この間にあつて歐米に漸次發達した科學的地理學も、明治初年以來我が國に輸入され、その影響を受けて前記の地理書・地誌類にもこの新しい科學的方法が採入れられて、江戸時代の地理書とはその内容に於ても面目を一新した。

5  
なほこの間に於て陸地測量部・水路部は、我が國內外に互つて精密實測に基づく基本地圖の作成を行つたが、このことは國土とその近接地域との實情を闡明する上に大なる貢獻をなしたものであつて、我が國の近代的發展の基礎をなす業績の一つであるといふことができる。

西洋に於ける地理の發達 次に西洋に於ける地理發展の跡を追つて見ると、我が國のそれと揆を一にする點が多い。西洋文化の源泉をなすギリシアの繁榮期は地理にとつてもその發祥期であり、また發展期であつた。この時代の地理には二つの異つた流れが存在してゐた。一つは宇宙・地球に関する一般的性質・哲學的問題等を論じ、それによつてこれらの間に存する一般法則を見出さうと試みる立場をとつた流れであつて、當時の地理が後世に至つて“學問の母”と呼ばれるに至つた所以はここにある。この學派はギリシアの哲學者によつて代表され、エラトステネス・ヒポクラテス・アリストテレス等がこれに係はつた。しかしこの學派と雖も地域的考察を等閑視したのではなく、例へばピタゴラス學派・アリストテレス學派の哲學者は地球の一般的問題を論ずると共に、氣候帶・居住性等の問題を論じてゐる。

他の流れは地誌的の考察を中心とする學派であり、ヘロドタス・ストラボ・トレミー等がその代表者として挙げられる。ヘロドタスは地球が多くの性質を異にした地域から成り、各地域には夫、特有の事象の生起してゐる事實を認めた。ローマに居住した地理學者ストラボの有名な地誌は、地域と人間生活との間に存する關係に就ての正鵠を得た觀察によつて、今日の水準から評價しても高く買はるべきものである。ギリシア地理學の最後の代表者と見るべきアレキ

サンドリアの地理学者トレミーは、人類居住の場所としての地球を系統的に考察し、各地域の特性を正確に表現せんと試みたが、彼の業績はその後16世紀に至るまでの長い期間、地誌の基礎資料として残った。この學派の地理即ち地誌は、政治・經濟・軍事上に利用價值が高かつたので、哲學的思索を重んずるギリシアよりも、實用を重んずるローマ・アレキサンドリアによく受け入れられた。以上の二つの流れはその後長く對立を続け、近代まで一般地理及び地誌として残った。

中世より近世初期に至る時代の地理は、地域事象の無批判的・百科辭典的羅列に過ぎなかつた。その多くは住民の習慣・宗教・政治形態や王室の財産等の事項が著者の興味に任せて記載されたものであつた。ただ一つの例外はヴァレニウスの一般地理學であるが、これもその時代の地理にはあまり影響を與へることなく終つた。ところが15世紀から16世紀にかけての大發見時代に入ると、未知の世界に關する地理的知識は新しく加はつたが、學問的には前時代に加へるところが少かつた。このことはギリシア時代の既知の世界が、狭くはあるが整然たる姿を以て配置され、その系統的把握には好都合であつたのに對して、當時の人士はあまりにも急激に増大する新しい様々の地域に對して、單に好奇心からの追及以上には進み餘力がなかつたためであると思ふことができる。しかし航海上の必要と大發見との結果として地圖學は著しく發達した。今日用ひられてゐる地圖投影法の如きは多くこの時期に考案されたものであり、後代の科學的地理發達の基礎を作つた。

ルネッサンスは地理學に對しては極めて大きな變動を與へた。天文學・地球物理學・地質學・民族學等は地理學から離れて獨立し、

後に残されたものは旅行案内的内容を持つもののみであつた。

大發見時代の後を享けた17—18世紀にも科學的地理の芽生えは未だ現れなかつたが、太平洋諸島の發見、太平洋周縁地域の輪郭の闡明が歐洲各國の航海者によつて行はれた。それと共に各大陸の内部の探検も行はれて、世界の地理的知識は正確且つ豊富になつた。

地理が再び學問的地位を恢復したのは、19世紀に入つて“近代地理の父”と認められてゐるフンボルトとリッターの二人がドイツに現れ、ギリシア時代以來の二つの流れの對立を克服してからのことである。博物學者でまた大旅行家でもあつたフンボルトは、野外觀察によつて生物の生活形態と自然條件との間に密接な相互關係があり、すべての生物が外界と適應して生存してゐる事實を認めた。リッターは歴史及び哲學の教養が深く、旅行はしなかつたが、讀書を通じて同様の結論に到達した。この二人の考へはギリシア時代からの地理の二つの流れの一元化に大いに役立つた。

ラツツェルは二人の後を享けてその説を發展せしめ、近代地理の基を固めた。彼は土地・地物・生物及び人間活動の足跡を以て地表を占居する實在と認め、それを地理學の研究對象とし、複雑なる人間活動を自然環境と結びつけて考へた。彼が環境論の中心人物と見做された所以はここにある。ラツツェルの思想は本國ドイツのみでなく、フランス・米國等にも大きな影響を與へた。

ラツツェルとほぼ時代を同じくして出たフランスのゲイダールはラツツェルの長所を採り入れ、また地誌の研究を奨励して今日のフランス地理學の基を築いた。

一方ドイツにはリヒトホーフエンが現れ、その流れを汲む學者が數多く輩出して自然環境の分析、人間生活の地理的考察、地域の綜

合的解明等、地理學のあらゆる分野に大きな貢献をなし、その直接の影響は中歐・北歐の諸國に及んだ。

米國に於てはラツツェルの思想がセンブルによつて移入され、人文事象の環境論的解説は一時地理學の中心課題たるかの觀を呈した。一方デイヴィスにより創始された米國流の地形學は、この國で獨創的發達を遂げ、地理學のみならず地質學にも大きな貢献をなした。またその實用を尊ぶ國柄を反映して、土地利用に関する研究も独自の發達を遂げ、地誌的研究の分野にも新機軸を出してゐる點が多いことは見逃すべからざる事實である。

なほ近代地理學の發達はかつて地理學から分離した他の科學、特に氣象學・地質學・民族學等の援助に俟つ點が多かつたことを特記すべきである。例へばオーストリアの氣象學者ケッペンの氣候分類の如きは地理學に極めて大きな貢献を與へてゐる。



## 第一章 地理に於ける環境の意義

### 第一節 環境の本質

環境とはこれを廣義に解すれば人間を繞る心的・物的背景の總稱である。従つて、その人間生活、並びに社會活動に對する意義の重大なることは多言を要しないのであつて、この理解なくしては地域の實相に對する謬らざる認識を體得することはできない。環境は分つて心的背景をなす文化環境と、物的背景ともいふべき自然環境とにする。狹義に解せられる環境は後者を指し、よく地理的環境とも稱せられるが、これが地理的觀點の基礎となり、前提となるものであることは、自然環境が人間活動の舞臺であり、それと不可分の關係に置かれてゐるといふ事實に徴して明かである。

在來地理は自然と人間との交渉乃至結合關係を論ずる學問の一つとされて來た。殊に近代地理の學問性を主張する人々は、錯雜した多元的な立場にあきたらず、地理の統一的な立場を自然と人間との交渉に求め、更に進んで文化現象を以て自然環境の直接・間接の所産であるとする觀點にまで進展した。所謂環境論がこれである。

環境論の成立により地理の發達・普及は著しいものがあつた。これにより地理の多元性は一應解消されたとも考へられ、幾多の文化現象の説明に於て、從來に見られなかつた新味を見出したことも確かである。一般文化現象をありのままに記述することに満足せず、その生起の過程を検討して、自然環境との關係に及ぶことは、それら文化現象の眞意義究明の上にも不可缺の視點である。かくして環

境論は地理に於てばかりでなく、他の近縁文化科學に於ても、文化現象の説明的方法の一つとして好んで廣く用ひられて來た。

“地を離れて人なく、人を離れて地はない”この言はよく地理に於ける自然環境の意義を現してゐる。すべての文化現象はその自然環境と無關係に生起するものではない。但し、かかる場合注意すべきは、自然環境は決して能動的に人間活動に働きかけるものでないといふことである。

これが人間活動の舞臺として、人間活動と一體となつて、その意義を發揮するためには、まづ人間の意志發動が前提でなければならない。即ち自然環境は人間活動に對して可能性を提供すること、及びその意義・價值は時代と共に、乃至廣義の文化段階と共に變遷し、また人間の意志判斷により相違を來すこと、ここに環境の眞意義がある。ここに於て單なる自然究明と、それらの環境としての意義開明とは根本的に別問題となるのである。

さればこそ、單に自然本來の特性のみを強調して、とかく對策究明の充分でない事例や、ややもすれば古代に於ける文化發達と自然環境との關係や、または自然の跳梁に委ねた親ある低文化の民族内に於ける自然環境の考察は、我等にとつて參考となるに止り、高度の文化を保持しつつ自然と親和し、これと一體となつて生きんとする現代に於ける開化諸民族の場合には、もとより適合すべくもない。今後我等の對處すべき環境は、遙かに複雑な意義を包含するものであり、またその對策は充分に眞劔、且つ徹底的でなければならない。

## 第二節 自然環境の構成

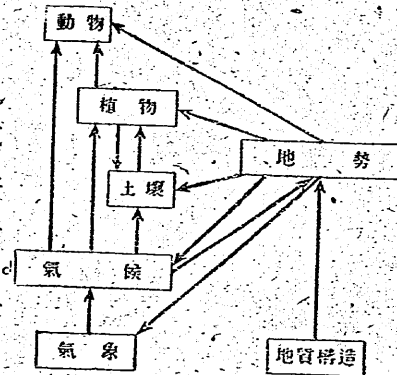
### 自然環境の構成要素

環境は以上の如き意義を有するものであるが、しからばこれを具體的に把握するには如何にすべきか。いま、狹義の環境、即ち自然環境の成因を分析するに、地球内部より働きかける作用と、太陽からの輻射エネルギーの作用といふ一應別個と考へられる二つの作用となる。故に環境の把握は、この二つの原因が地球表面に働いて生じた様々の特徴を、如何に人間活動的の立場から分析し、比較した上で、綜合的見地から系統化するかといふ點に存する。

しかし太陽の輻射エネルギーが地表に到達して發現する諸現象は、萬物を化育する根源をなすものであり、それに次いで基礎的であるものは地球内部からの作用であることを否むことはできない。即ち、それらの直接の表現である氣候と地勢とは環境の基礎的二要素ともいふべく、その他の環境要素、例へば土壤・生物の如きも、これら二要素の上にそれらと結びついて形成され、生育してゐるのである。故に一應氣候を中心とする環境と、地勢を中心とする環境とに分けて考察する。

### 氣候を中心とする環境

これは氣象を基礎とし、それを通じて決定される氣候を中心とし、更にその上に土壤・植物・動物と積み上げられた一聯の系統である。太陽エネルギーの効果が最も著しく現れるところは、氣圈と地表との接觸する部分である。地表に達した太

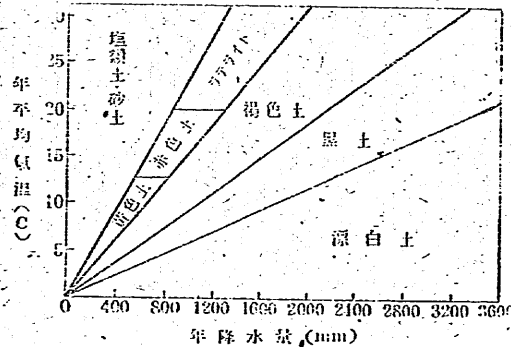


第1圖 自然環境を構成する各要素相互間の關係を示す

陽エネルギーはここに於て熱的效果を現す。地殻も水も熱の不良導體であるから、地表に達した熱は地下の淺所に達するのみで、地表を通じて再び大氣中に戻り、氣圈の下層に熱を傳達する。

熱は對流によつて氣圈の上層へ傳達されるが、對流の行はれる範圍は、地上7 km乃至17 km程度までの對流圏に限られる。しかしして氣温の變化・雲・風・降水等の大氣現象は、對流作用の直接・間接の結果として起るのである。従つて氣象變化はこの氣圈の薄い最下層に於てのみ行はれてゐるのである。しかも地球は球に近い回轉楕圓體であつて、自轉・公轉を行つてをり、且つ地球の軌道面と赤道面とは  $23^{\circ}27'$  の角度を以て交つてをり、また水陸の配分が複雑であること等のために、氣象の平均の状態、即ち氣候は地球上所を別にするにつれて異なることとなる。かくて地球表面は太陽の恵みの程度を異にする多くの氣候地域に分たれ、また季節の別をも生ずるに至る。

各氣候地域には夫々の氣候に特有な風化作用が行はれるから、充分に成熟せる殘積土は夫々の地域に於て性質を異にし、かくて氣候



第24圖 氣候と土壌との關係を示す

的土壌を生ずる。

氣候と土壌とは相俟つてそこに生育する植物の性質を支配し、更に直接・間接に植物に依存する動物相にも影響する。更に農・林・畜産等を包

括する地上資源は、人間生活の基本的必需物資たる衣食住の原料として不可欠であるばかりでなく、その生産額よりするも、生産従事者の數よりするも、最も重要な資源であるが、何れも生物性のものであるから、その生産は氣候・土壌と關係するところが大きい。

また氣象・氣候は風化作用の性質のみならず、侵蝕・運搬・堆積といふやうな地勢變化の原因となる作用の性質をも支配し、これを通じて地勢の性質を決定し、また堆積岩の性質にまでも影響を及ぼしてゐる。例へば濕潤な氣候の下にあつては、流水の作用が地勢變化の主因となつて、これに基づく侵蝕形・堆積形が生ずるのに對して、乾燥氣候の下にあつては、風化作用と風の作用とが卓越し、稀に偶發的に見舞ふ豪雨も、植生の少い地表に働いて特色ある地勢を現す。また寒冷氣候の下にあつては、氷河の作用が地勢變化の主因をなすことも、氣候が地勢の性質を支配する好例である。

#### 地勢を中心とする環境

これは地球内部より働きかける作用、即ち内因的作用によつて生じた地表の凹凸に對して、氣象變化が重力と結びついて地表の外側から働きかける作用、即ち外因的作用が與つて生じた地勢を主とする環境である。地勢はその上に展開する人間生活の舞臺となり、その性質の相違は人間生活に異つた可能性を提供し、一方氣候を中心とする環境に對しても大きな影響を與へてゐる。

地勢形成の基礎的因子たる内因的作用は、また地質構造を決定し、地下資源の形成に與る有力な原因でもある。また地質構造は内因的作用に基づく地勢の性質をも支配する。例へば若い地向斜の堆積物の地域に造山作用が働く時は、軟かい地層は容易に褶曲し、連続的に連なる列狀・孤狀の狭長な山系・列島を造る。しかし既に屢次に互



る造山作用を蒙つて堅硬な地殻となつた土地に更に造山作用が働いた場合には、地殻を断裂せしめて断層を生ずる傾向が強くなり、従つて山地も連続性を缺く断層山地の性質を帯びるに至る。また地質構造は外因的作用と相俟つて各種の選擇侵蝕に基づく地勢を形成する。

このやうに一方に於ては、太陽エネルギーを根源とする気候環境が成立し、他方に於ては、内因的作用を根源とし、これに外因的作用が與つて形成される地勢環境が成立し、これらは兩々相俟つて人間活動の前提としての自然環境を構成する。第1圖は自然環境を構成するこれら諸要素相互間の關係を簡単に圖示したものである。本書に於ては、主として自然環境を人間生活との關係に於て取扱ふ。

## 第二章 生活圏としての主要自然地域

### 第一節 主要自然地域

#### 地域による自然並びに人間生活の相違

地球上には22億に餘る人類が生活してゐる。しかし人類は決して地上に平等に分布してはゐない。また各地一樣の活動状態を示してもゐない。衣食住の如き人間生活の基礎的事項に就て見ても、或は文化段階・民族性等に就て見ても、地域の異なるに従つて著しく様相を異にしてゐる。單に注意を東經70°—180°の地、即ち東亞及び大洋洲に限るとしても、一方支那・印度の如き有り餘る人が地に充ち、零細なる集約農業、低い生活程度、著しい社會的停滯性等を特徴としてゐる所があり、他方濠洲やニュージーランドの如く、人口が稀薄で可耕未墾地に富み、世界一と稱せられる物質の豊かな生活の營まれてゐる所もある。このやうに世界一の人口稠密地域と世界一の稀薄な地域とが、赤道をさし挟んで僅かの距離を以て相對してゐることは、世界の人口分布上の一大特徴である。

また一大陸内にあつても、人類の生活様式は決して一樣ではない。例へばマライより東印度諸島にかけての地方の如く、原住民の水田耕作を主とする自給的農業と、温帯の住民の必需品たる各種熱帯農産物を目的とする農園農業との混在してゐる所があり、また中・南支の如き自給的水田耕作を主とし、これに養蠶業・茶・棉花の如き暖帯作物の栽培が附隨してゐる所がある。またその北方には、黄土地域の上に營まれる北支の集約的の畑作農業地域が連なり、その西

方に於ては、農耕の重要性は減じて、農業としては乾地農法若しくはオアシス農業が行はれるが、大部分を通じて羊の遊牧を主とする地域が廣く展開する。北方のシベリアは、南部にスラヴの新しい移民による有畜農業が營まれ、またソ聯の各種の新計畫に基づく發展が活潑に行はれて來たが、大部分はなほ狩獵・遊牧を事とする原始民族の居住地として残されてゐる。森林も盡きんとする極北ツンドラの地は、最近のシベリア内部の開拓に伴ふ交通上の要衝を除いては、夏の期間に馴鹿の遊牧を事とする民族がこの地に移動して來るのみである。

このやうに地域毎に人類の生活様式が異つてゐるといふことは、地理を學習する基礎的前提をなすものであり、その原因を考へ、現状を究めることによつて始めて各地域の特性が明かになる。かくして得られた基礎的知識に立脚してこそ、世界各地域の持つ意義と荷ふべき使命の把握とに對する眼識が養はれ、自國並びに他國の國勢を正しく判斷する識能・能力も涵養されて來る。

このやうな地域的相違性を生み出すに至つた原因は多々あるが、最も基本的の原因としては、まづ各地の持つ自然條件の相違性が考へられる。勿論前章に述べたやうに、一定の自然條件が一定の生活様式を生むものであるといふやうな決定説は正鵠を得たものではないが、人類の活動が土地を舞臺として營まれる以上、その上に展開してゐる人間生活は、その歴史的發展過程を通じて土地の先天的に持つ自然的特質と絶えず關聯し、またこれと結びついて地域毎に独自の文化を形成してゐることは、歴史を通じても、現状を通じても、明かに看取される事實である。これが地理學習の第一歩として、まづ地球の表面を夫々の特徴を持つ自然地域に分ち、それらの特性を

詳にすると共に、それらが人間生活の基礎的前提として、即ち環境として如何なる意味を持つかを明かにしようと試みる所以である。

#### 主要自然地域設定の基礎としての氣候と地勢

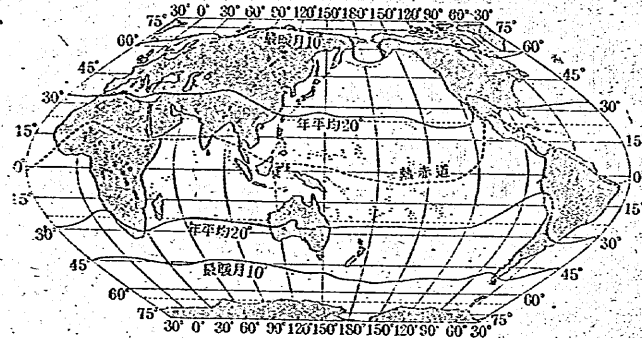
人間生活は地表を中心とし、氣圈の下層部より水圈・岩石圈の上層部にまで及んでゐる。しかしてその自然的性質を左右する基礎的要素は、太陽熱に因由する氣候と、地殻運動に起因する地勢とである。即ち地球表面の單位面積が太陽から受ける熱量は緯度によつて相違し、また陸地と海洋とは熱に對して異つた受け入れ方をする。これが地球表面が夫々、異つた大氣の状態を示すいくつかの氣候地域に分たれる根本の原因である。一方地殻運動の原因は、未だ充分究明されてゐないが、その結果は地殻内部の構造を決定し、地勢の原形を支配する。

さて氣候と地勢との何れが人間の生活に深い關係を持つてゐるかは地域によつて異り、必ずしも簡單にはいへない。しかし人類に限らず、人間生活に必須の地上資源、即ち諸生物は一に太陽の恵みによつて生育するものであり、一方地勢の中で、人間活動を著しく支配する山岳地域は、大觀すれば地球上限られた地域に分布してゐるに過ぎず、そこにも山岳特有の氣候が生活の上に強く働いてゐるのであるから、これを大局的に見る時は、自然地域を特徴づける第一の據り處としては氣候をとることが妥當である。

即ち主要自然地域の設定に當つては、その據り處をまづ氣候に求める。第二章は氣候環境を中心とした主要自然地域の解説である。しかし地勢の環境としての意義も、地域究明の場合には輕視することができないから、環境的觀點に立脚した地勢を第三章に於て説明する。

### 氣候帯と氣候圖

地球表面をほぼ類似した氣候を具へた地域に大別し、その各の地域を氣候圏といふ。氣候要素として最も重要なものは氣温であり、これに次いで降水量・風等である。氣温の高低は主として日射量の多寡に因出し、日射量はまた緯度の高低により定まるから、従來緯度を界とした帶狀の地を定めて氣候帯とし、地球上を熱帯・南北溫帯・南北寒帯の五つの氣候帯に分けてゐた。即ち回歸線(緯度23°27')と極圈(緯度66°33')とを以て氣候帯の境界とし、熱帯は南北の回歸



第3圖 氣温に基づく熱・溫・寒の氣候帯

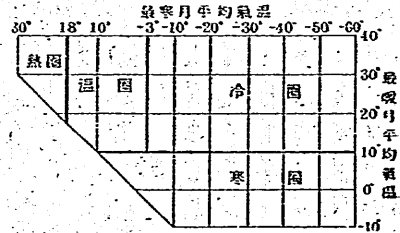
線の間、溫帯は回歸線と極圈との間、寒帯は極圈より極に至る地帯とした。この氣候帯は日出・日没の時刻、晝夜の長さを問題とする場合には好都合であるが、氣候要素に立脚したものではないから氣候帯としては多くの缺點がある。更に實際的な氣候帯としては、年平均氣温 20° 以上の所を熱帯、最暖月の平均氣温 10° 以下の所を寒帯とし、間の地帯を溫帯とする分け方がある。かくすれば熱帯はほぼ沿岸に椰子の生育・結實する所と一致し、寒帯はほぼ森林の限界

以外となる。

しかし生活との關聯より見た場合には、乾燥のために、植物や農作物の生育はもとより、人類の生活も極度に制限される乾燥地域、及び夏は樹木を生長せしめ、農作物を生育せしめるに足る氣温に達するが、冬は酷寒のため、動植物は勿論、人間生活も各方面に互つて冬眠する冷涼地域をこれに加へる必要がある。これらの熱・溫・冷・寒・乾の各地域は必ずしも地球を帶狀に取巻くことなく、或は乾燥地域の如く大陸の中央で終り、或は溫暖地域の如く熱帯高地の上にも斑點狀に分布してゐるから、帶よりはむしろ圈である。かくて次に表示するやうに、地球上は熱・溫・冷・寒の氣温を主とする四つの氣候圏と、寡雨を特徴とする乾燥圏と、併せて五種の主要氣候圏に分つことができる。

各氣候圏は、更に氣温の高低、降水量の多寡、風の強弱等の特徴、及びそれらの季節的配分の相違によつて多くの氣候區に分れる。これらの具體的の説明は各節に譲ることにして、いま生活圏として見た氣候地域の主なものを列挙すれば次の如くである。

- A 熱 圏 一年を通じて低  
溫期のない所(最寒月氣温  
18° 以上の所)
- 1. 熱圏雨林地方
- 2. 熱圏乾林地方
- 3. 熱圏高地地方

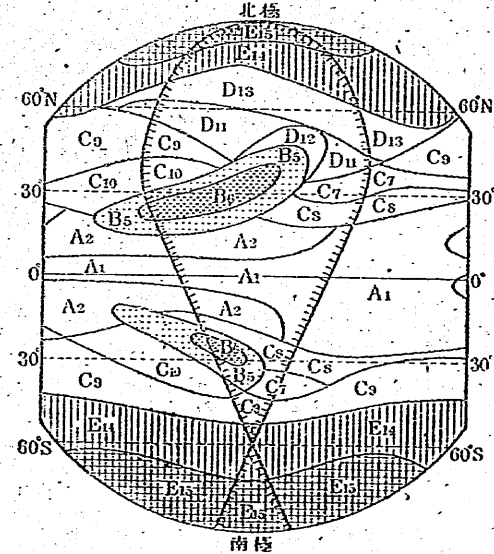


- B 乾燥圏 降水量の少いた  
めに森林の繁茂を見ない所(濕潤地域との限界の求め方は第五節参照)
- 4. オアシス地方 5. 乾草原地方 6. 沙漠地方

(1) 氣候帯と氣候圖

- C 温 帯 高温なる夏と、冷涼なるも酷暑ならざる冬を持つ所、即ち四季を有する所(最寒月 15° ~ -3°, 最暖月 10° 以上)
- 7. 温帯季節風地方 8. 亞熱帯季節風地方 9. 海洋性西岸地方
- 10. 地中海性地方
- D 冷 帯 森林を繁茂せしめるに足る気温に達する夏と、土地・陸水・海水共に凍結し、植物の冬眠する酷暑の冬を持つ所(最寒月 -3° 以下, 最暖月 10° 以上)
- 11. 冷帯混生林地方 12. 冷帯森林乾草原地方 13. 冷帯針葉樹林地方
- E 寒 帯 夏の低温により森林の繁茂を見ない所(ほぼ最暖月 10° 以下の所、限界の求め方は第六節参照)
- 14. ツンドラ地方 15. 氷雪地方

假想大陸上に於ける気候帯・気候區の配置



第5圖 假想大陸上の気候地域の配置

これらの気候地域は、必ずしも地球上に規則正しく配列されてはゐないが、さりとて決して無系統に配列されてゐるでもない。いま地勢の錯雑性を除いた假想大陸、即ち海拔高度の小さい平坦地より成り、北半球の中緯度中部で最も廣く、極附近で急に狭くなり、また南方には次

第に幅狭くなつて、南緯 60° 邊で尖狀に終る大陸を考へ、その上に如何様に気候帯・気候區が配置されるかを理論的に考へて見ると、第5圖の如くになる。

即ち赤道附近は四時高温な熱帯(A)であるが、その中でも南北緯 6° 位までの間は、一年を通じて高温・多雨な熱帯雨林地方(1)である。この地方が大陸の東側では緯度 17° 位にまで達してゐるのは、乾季に相當すべき冬に貿易風に基づく降雨があるためである。一方大陸の西側の緯度 15° 乃至 30° の地域、即ち回歸線を中心とした地域は、回歸線高壓帯の存在と低い海水温度とのために乾燥帯(B)をなし、それより大陸の内部の高緯度地方へ向かつて斜めに延長し、北半球では北緯 50° 邊に達してゐる。乾燥帯は乾燥の程度に應じて乾草原地方(5)と沙漠地方(6)とに分れ、後者は中心部にあり、前者はこれを取巻く。

熱帯雨林地方と乾燥帯との間は、気温の點からいへば熱帯であるが、太陽の季節的移動によつて、気候帯が南北へ移動するため、各半球の夏、即ち高日時には赤道常雨帯の状態となつて雨季に入り、冬、即ち低日時には乾燥帯の状態が支配して乾季となる。即ち兩者の間にはその漸移帯として冬の乾季と夏の雨季との明瞭な熱帯氣候が現れる。さうして赤道を離れるに従つて、乾季の長さは増加し、降水量は減少する。その結果、植生も熱帯半落葉樹林・熱帯叢林・熱帯乾草原と次第に疎生性のものに移つて行く。後の二者によつて代表される所が熱帯乾林地方(2)である。

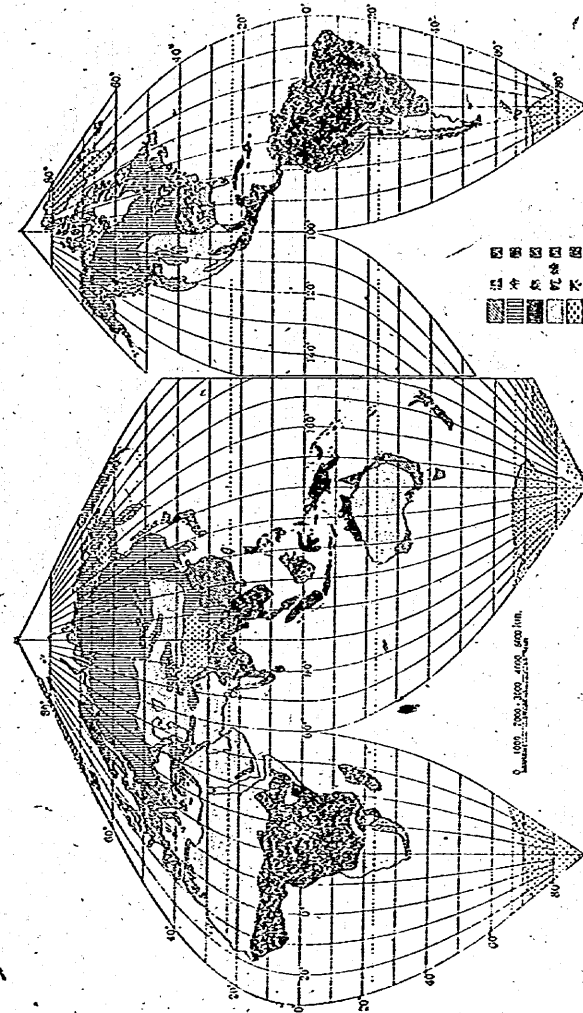
大陸の東側の回歸線附近は、夏の季節風による雨、若しくは熱帯性・温帯性低氣壓による降雨のために乾燥帯を缺き、熱帯乾林地方は緯度 20° 附近を界として直ちに冬のある温帯(C)となるが、高日

季に多雨の傾向は依然として認められる。このやうに大陸東側の温  
帯は、夏の多雨と冬の寡雨との対照が顕著なことを特徴とする。亞  
熱帯季節風地方(8)・温帯季節風地方(7)はこの地に當る。

これに對して大陸西側の緯度 40° より 55° 附近に至る中緯度地方  
は、偏西風の影響を受けて著しい海洋性氣候を呈し、特徴としては  
冬が緯度の割合に温暖であり、また偏西風と温帯性低氣壓のために  
乾燥季を缺く。この海洋性西岸地方(9)と乾燥圏との中間のほぼ 30°  
から 40° にかけての地域は、兩者の漸移帶として、季節の推移に基  
づく氣候圏の移動によつて、夏は乾燥圏の状態が支配して高温・乾  
燥、冬は温帯海洋性の状態が支配して温暖な降雨季となる。これが  
地中海沿岸を代表地域とする所謂地中海性地方(10)である。

南半球では緯度 40° 邊から大陸の幅が急に狭くなり、60° 以南に  
及んでゐないから、以上の氣候圏で終つてゐるが、北半球では温帯  
の北方が冷帯(D)に移る。北緯 60°~70° に於ては大陸の幅はなほ  
も廣いから、西側の偏西風の影響の下にある地域を除いては、緯度  
の増加による夏と冬との日射量の相違の著しいことも手傳つて、典  
型的な大陸性氣候を呈するに至り、夏は氣温が森林を繁茂せしめる  
に足るほど高くなるが、冬は酷寒が支配して冬眠季に入る。かかる  
冷帯が大陸を東西に横斷してゐることは、熱帯雨林地方と同様であ  
る。さうして西側では北緯 55° 以北の地で温帯と接するが、東側で  
は 42° 邊にまで降る。冷帯は夏の長短及び氣温の高低により、南部  
の混雑林地方(11)と北部の針葉樹林地方(13)、及び乾燥圏に接する  
森林乾草原地方(12)とに分けられる。

兩極を繞る高緯度地方は、夏季の低温のために、森林の繁茂の許  
されない寒帯(E)となるが、これは更に夏の平均氣温が氷點以上に



第 6 圖 世界氣候區圖

達するツンドラ地方(14)と、氷點に達しない氷雪地方(15)とに分たれる。假想大陸は北半球では北端で幅狭くなるから、沿岸地帯はツンドラ地方であるが、南半球では南極を中心とする大陸があるから、その中心部は氷雪地方に入る。

以上は假想大陸に就て考へたのであるが、實際は山地の存在、陸地の輪郭の複雑なこと等のために、規則正しい氣候地域、即ち主要自然地域の配置は多少亂れて來る。第6圖及び附圖は實際の配置を示したものである。

## 第二節 溫 圈

### 文化圈の中樞地としての溫圈

溫圈は主要國家の中樞地の存する所であり、世界人類の大多數の居住する所である。世界の主要民族は何れも溫圈をその活方の根源地としてゐる。熱圏や冷圏の一部に溫圈に劣らないほどの人口と生産力とを擁してゐる所もある。しかし今日これらの地域はそれ自身が主體的立場を持して存在する所は殆どなく、溫圈の培養圏として存在してゐるに過ぎない。寒圏や乾燥圏もまた同様である。古代文化發祥の地の多くは乾燥圏に屬してゐるが、それらの地域は決して純然たる乾燥圏ではなく、用水の供給の充分な外來河川沿岸の沃野に限られてゐて、乾燥圏の最大の惱みたる水の不足は、灌漑用水によつて立派に補ひ得てゐるから、實質的には溫圈の變形と見做すことができる。

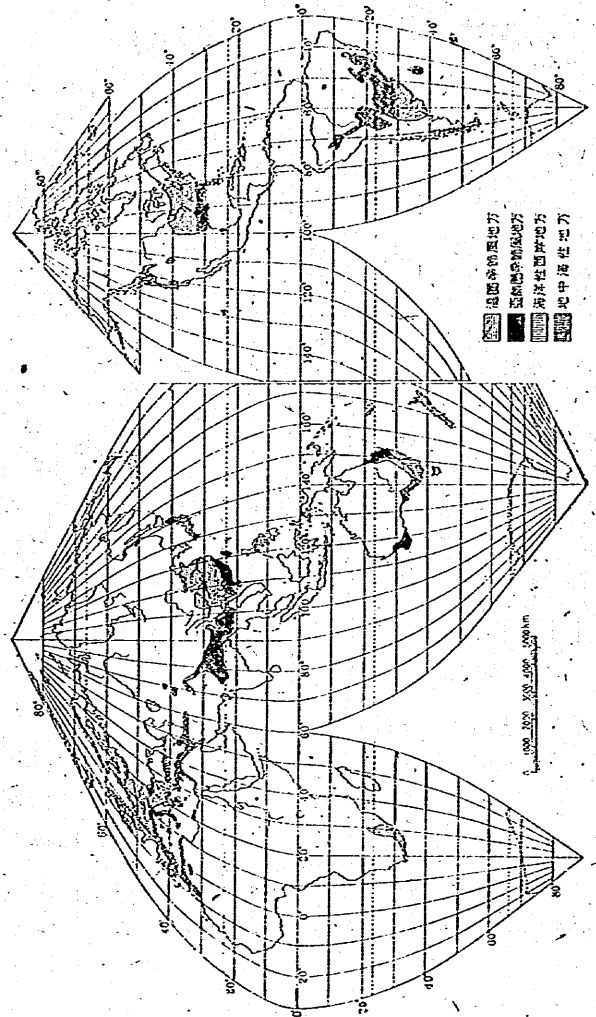
溫圈は人類の活力を最大限に發揮し得る所である。そこには四季の別があり、熱圏に匹敵する高温の夏と、極寒ではない冬と、その間には快適な春と秋とがある。かかる季節の推移は生活に適當の變

化と刺激とを與へ、熱圏の最大の惱みたる四季なき單調からも、冷圏の最大の缺點たる冬眠からも免れてゐる。夏が高温であることは、熱圏より土壤が肥沃なこと、野生生物との競争の少いこと等と相俟つて、産業の主體をなす地上資源の生産に有利である。

### 特徴と區分

溫圈は氣温の年變化が比較的著しく、四季の別の明瞭な點に於て熱圏と異り、また冬の寒さが極端でない點に於て冷圏と異る。最寒月の $-3^{\circ}$ の等温線は冷圏との境界に當り、同じく $18^{\circ}$ の等温線は熱圏との境界をなす。かやうに冬の寒氣は一般に厳しくないから、降雪が根雪となつて長期間地表を覆ふやうなことや、土地や陸水が連続的に凍結することは殆どない。故に冬眠の現象も著しくなく、冷圏に近い最北部を除いては農作物の裏作も可能である。特に南部は亞熱圏となるから、凍冷の期間は短く、農耕は一年を通じて可能である。一方夏は比較的高温で、特に中部より南部へかけては、最暖月平均氣温が $25^{\circ}$ 以上に達して熱圏の状態となるから、各種の熱圏性・亞熱圏性の一年生作物を栽培することもできる。なほ降水量は乾燥圏の限界以上あつて森林を繁茂せしめるに足りる。

自然の状態に於ける森林は、一般に潤葉樹林または混生林が卓越するが、土壤の條件のよくない砂地等では針葉樹が多く、降水量の比較的少い所は現在草地となつてゐる箇所もある。化學的風化作用は熱圏に次いで旺盛であるから、殘積土は厚くなるが、同時に漂白・溶脱の作用も熱圏に次ぐから、土壤は腐植の含有量・礦物性營養共に比較的少い赤色乃至黄色土を一般とする。従つて土壤は熱圏よりも良好であるが、決して肥沃とはいひ難い。しかし河川の齧す物



第7圖 温帯分佈と區分

質が絶えず堆積する沖積平野は肥沃である。東亞の温帯に於ては、この狭い沖積地に農村人口の大部分が集中し、集約的な米作農業が営まれてゐることの一因はここにある。

地勢的には河系の發達が著しく、流水の侵蝕及び堆積作用に基づく地勢が最もよく發達する所である。

温帯は以上述べたやうな自然的特徴を具へてゐるが、これは更に氣候・土壤・植生等の條件から次の如き諸地方に分けられる。その分佈は第7圖に示す如くである。

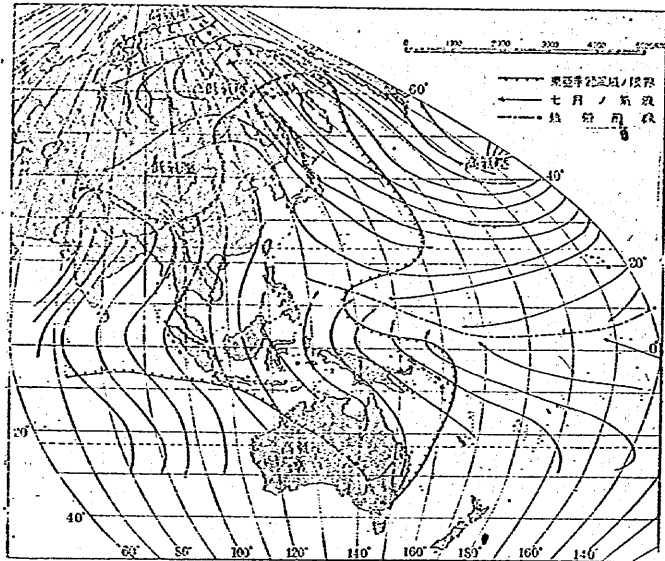
1. 温帯季節風地方 大陸東側の純温帯氣候の所
2. 亜熱帯季節風地方 大陸東側にあつて、温帯季節風地方の南に接する所
3. 海洋性西岸地方 大陸西側にあつて、偏西風の影響の下にある所
4. 地中海性地方 大陸西側にあつて、海洋性西岸地方と乾燥圏との漸移的の所

### 一 温帯季節風地方

#### 東亞季節風

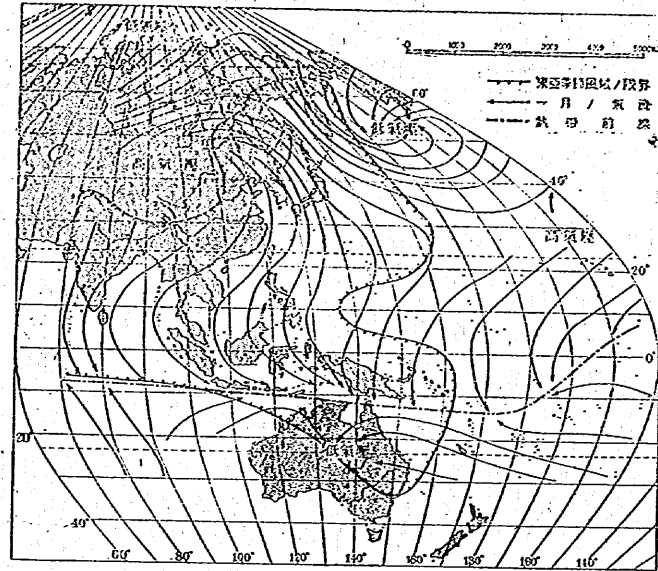
中緯度の大陸東側は、一般に季節風が卓越する傾向があるが、特に世界最大の大陸と海洋との中間に位する東亞に於ては、その發達が著しく、氣候もまた少からずその影響を受ける。しかも東亞の季節風は、北半球の温帯のみならず、北は冷帯より南は熱帯を越えて、濠洲の温帯にまで及んでゐる。従つて全東亞を一貫する氣候は、おしなべて季節風氣候といつて差支へがない。

夏の季節風 季節風の風向・風速等は時と所によつて異なる。夏には太平洋沿岸方面の季節風は微弱で、これによつて沿岸の風浪が高ま



第8圖 東亞夏の季節風

るといふやうなことはない。風向は我が國沿岸より黄海沿岸にかけては南東風であるが、以南は赤道に至るまで南西であり、南半球では南東風である。各地域に於けるこのやうな風向の差異は、それらが別々の風系をなすためではなく、一聯の風系の一部を表すものである。即ち、この時期は南半球の冬季に當るから、濠洲内陸の高壓部より吹き出る季節風は、それに續く中緯度高壓帯より吹き出る貿易風と同様、地球自轉に基づく偏向力によつて、まづ南東風となり、赤道を越えて北半球に入れば南西風となり、北方へ赴くと附近に於ける氣壓の最低部たるアジア大陸中央部に向かふ傾向が強くなつて、北太平洋よりこの方面へ向かふ季節風と共に、南東風となるのであ



第9圖 東亞冬の季節風

る。またこの季節は比島東方洋上に頻發する熱帯性低氣壓、即ち颱風が比島及び安南北部以北の地に暴風雨を齎し、また大陸内部方面よりも屢々、温帯性低氣壓が襲來するから、これらが濕潤な季節風と相俟つて、夏に多雨の傾向を一層助長する。

印度方面の夏の季節風は、太平洋方面と異り、風速・湿度共に大である。故に印度洋は夏の季節風によつて大いに荒れ、航海者を惱ますことが多い。この季節風は元來南半球の南東貿易風が赤道を越えて吹き來つたものであるが、印度北方の氣壓が低いために風速は大となり、その上熱帯洋上を長く吹いて來るから高温濕潤となり、これが印度に夏特に多量の雨を齎す主因をなしてゐる。殊にヒマラ



Approved by Ministry of Education  
(Date Apr. 26, 1946)

昭和十一年四月廿六日印刷  
昭和十一年四月三十日發行  
昭和十一年五月一日翻刻印刷  
昭和十一年五月十八日翻刻發行  
(昭和十一年五月一日文部省検査済)

師範地理 本科用 卷一

定價金壹圓

著作權所有 著作發行者 文 部 省

東京都神田區錦町一丁目十六番地

翻刻發行者 師範學校教科書株式會社

代表者 森下松衛

東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷者 大日本印刷株式會社

代表者 佐久間長吉郎

東京都神田區錦町一丁目十六番地

發行所 師範學校教科書株式會社